

小学校におけるフォロワーシップ教育教材の開発

Development of Teaching Materials for Followership Education at Elementary School

田中 沙季, 今井亜湖

Saki Tanaka, Ako Imai

岐阜大学教育学部

Faculty of Education, Gifu University

Email: u1027407@gifu-u.ac.jp

あらまし：本研究ではすべての児童が評価される集団活動の実現のため、集団に所属するメンバーの、集団に対する影響力を指す「フォロワーシップ」を育成することが重要であると考えた。しかしながら、フォロワーシップに関する教育事例が小学校では確認できなかったため、本研究では、小学校でフォロワーシップ教育を実施するための教師用教材の開発を行った。

キーワード：集団活動、フォロワーシップ、フォロワーシップ教育、小学校、教師用教材

1. はじめに

2017年に開かれた教育再生実行会議では、「子供たちの自己肯定感を育む取り組みを進めていく必要がある」ことが提言された。

この提言をふまえ、文部科学省は取り組みの1つとして「異年齢交流等の推進」を行っている。異年齢交流とは、意図的に年齢の異なる集団を構成して活動の場を設けるものである。異年齢交流の活動は、複数学年が関わる「縦割り活動」と、上級生と下級生が関わる「お世話活動」の2つに分けられ、社会性を育むことが効果として挙げられている⁽¹⁾。

異年齢交流において社会性がどのように育まれているかを調査したところ、下級生の児童には「集団の一員としての役割」という社会性が認められづらく、児童自身が活躍できる役割や場所が少ないため、自己肯定感が獲得できない活動になっているのではないかと考えた。

そこで、「自己有用感」に注目した。「自己有用感」とは、自分と他者との関係を受け入れた上での肯定的な自己評価のことであり⁽²⁾、他者との関係をふまえた評価という点が自己肯定感とは異なる。異年齢交流を「自己有用感」を育む活動にすることができれば、全ての児童が集団の中で役割を果たすことができる考えた。

異年齢交流の場でどのように自己有用感を育むのか。本研究では、集団に所属するメンバーの、集団に対する影響力を指す「フォロワーシップ」という概念に注目する。異年齢交流の場ですべての児童がフォロワーシップを発揮できれば、集団を形成する全てのメンバーが肯定的な評価を獲得でき、自己有用感の獲得につながると考える。そこで、本研究では、フォロワーシップを初めて指導する教師のための支援教材を開発することにした。

研究方法は次のようにした。まず、フォロワーシップ教育の指導内容を調査し、その結果より、小学生を対象としたフォロワーシップ教育プログラムの

開発を行った。さらに、この教育プログラムを指導するための教師用教材を開発した。

2. フォロワーシップ教育の指導内容の調査

小学生を対象としたフォロワーシップ教育の事例が確認できなかったため、リーダーとなる児童に対する指導内容を分析することにより、集団の中で役割を発揮するための指導の要素を明らかにすることができると考えた。同時に、小学校以外で実際に行われているフォロワーシップ教育の実践事例を調査し、小学生を対象としたフォロワーシップ教育の指導内容について検討することにした。

前者の調査より、「ほかの人のことを考えて自ら行動をおこすこと」を目的とする指導が必要であることが明らかになった。一方、後者の調査より、館野・高橋(2018)が開発した「誰でも集団のために発揮できるリーダーシップ教育」が、組織の様々な立場から集団に発揮する影響力について学習するものであり、フォロワーシップと適合すると考えた。この教育プログラムの指導内容において、小学校で適用できる内容を抽出したところ、4つの内容(基礎理解、倫理性、自己理解、スキル)が該当し、これを本研究で開発する教育プログラムの指導内容とした。

3. フォロワーシップ教育プログラムの開発

上述したフォロワーシップ教育プログラムの指導内容をもとに、ADDIEモデル(Dick他2004)を手がかりにして教育プログラムを開発した。

分析フェーズでは、プログラムの目標を「学校行事などの特別活動に対する児童の振り返りを通して、自分にあったフォロワーシップ行動を選択することができる」と設定し、対象を小学5年生とした。

設計フェーズでは、分析フェーズで設定した目標をもとに下位目標を検討し、分析を行った。その結果明らかになった課題を4つに分け、4つの授業からなる教育プログラムを設計した(表1)。

開発フェーズでは、教育プログラムを小学校で実践してもらうためにはどのような支援が必要かを検討した。その結果、教師が参考にできるような教師用教材を開発することにした。

表1 フォロワーシップ教育プログラム

	授業名	学習内容	資質・能力
1	全員で作るグループ活動	集団に対する自己の在り方をきめる	倫理性
2	グループの「メンバー」になる	自分の行動を振り返るための観点を立てる	基礎理解
3	「役に立つ」を考える	集団に必要なフォロワーシップ行動を選択する	スキル
4	自分だからできること	集団において取るべき行動の目標をたてる	自己理解

表1は、本研究で設計した4つの内容からなるフォロワーシップ教育プログラムを、「授業名」、「学習内容」、「資質・能力」の3項目から示したものである。「授業名」は、教育プログラムにはフォロワーシップ独自の内容を分かりやすく示すことが必要であると考え、小学生に対して学習内容を分かりやすく示すために設定した。「学習内容」は、学習を通して児童が目指す姿を明確にするために設定した。「資質・能力」は、2章で明らかにした4つの指導項目が教育プログラムのどこに反映されたかを示した。

4. 教師用教材の開発と評価

教材の内容は「本冊子の概要」、「使い方」、「『フォロワーシップ』とは何か」、「『フォロワーシップ』を学習する背景」、「対象学年」、「プログラムの構成」、「教育プログラム」である。

開発した教材の主要な部分である教育プログラムについては、授業ごとに「学習目標」「指導内容」「本時の位置づけ」「指導方法」の4つの内容を解説した(図1)。また、教師用教材の指導方法に沿って児童用教材の開発を行い、教師用教材の中に掲載した。

教師用教材の使いやすさに関して、小学5年生の指導経験年数12年の小学校教員に教材案と評価用紙を送付し、評価を実施した。評価方法は、メールで教師用教材と評価用紙を送付し、プログラム中のキーワードの理解度について評価用紙に記入、また教師用教材の内容に関して扱いにくい点を自由に記述してもらった。その結果、キーワードについて8点、キーワードの説明に関して3点、冊子の内容に関して25点の指摘・助言があった。具体的には、フ

ォロワーシップを説明する図にリーダーへの言及がない、授業設計という言葉になじみがないなどの指摘であった。これらの指摘等をもとに、教師用教材の改善を行い、教材を完成させた。

1 全員で作るグループ活動

学習目標
 集団活動がうまくいかない理由を挙げることを通して、自分が所属する集団の現状を理解し、集団に対する自己の在り方を決めることができる。

指導内容

自己理解	○倫理性 ↳ 集団がうまく機能するためには、メンバー全員が働くべきである、という倫理基準に従って行動すること ・ 集団のために行動する責任がある ・ 集団のために協力する責任がある
スキル	
基礎理解	
倫理性	

本時の位置づけ
 本プログラムでフォロワーシップを学習するにあたり、児童がその学習する必要性を理解している必要があります。本時は、何のためにフォロワーシップを学ぶのか、という学習目的を定着させる時間です。「誰でも集団のために動く責任があるため、リーダーではなくとも集団の役に立つことができるフォロワーシップを学ぶ」という目的を明確にすることで、意欲的に取り組むことができるでしょう。また、自己の在り方を決めるという、振り返りを行うための基盤となる時間になります。児童が自分の大枠の目標を言葉にすることを通して、役に立つという意識へ方向付けることを目指します。

指導方法
 児童用教材は3つの構成になっています。

1. 「リーダーしか動かなかった」(行動する責任)「メンバーが協力しなかった」(協力する責任)の事例を読み、グループがうまくいかなかった理由を挙げる。(①、②)
2. 自分のグループはどちらにあてはまるか判断する。(③)
3. グループで自分はどうのように役に立つか書き出す。(④)

 児童用教材の①では、メンバーが行動するべきだった・協力するべきだった例が挙げられています。②でうまくいかない理由を挙げることを通して、集団のために行動する・役に立つことの価値に気づかせると良いでしょう。③、④では事例と自分の状況を照らし合わせ、②の理由を根拠に、役に立つという意識へ方向付けることができるような指導が望ましいです。

図1 教師用教材の一例

5. おわりに

本研究では、すべての児童が評価される集団活動に注目し、初めて児童にフォロワーシップを指導する教師に概念や指導するべき要素を提供するフォロワーシップ教育プログラムを開発、この教育プログラムを実践してもらうための教師用教材を開発した。

今後の課題としては、実際に授業を行うことができなかつたため、児童がフォロワーシップを理解、実践することができるかを検証する必要がある。

参考文献

- (1) 牧田章ほか：“現代学校教育大事典”，東京：ぎょうせい（1993）
- (2) 文部科学省 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター：“生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも「自己有用感」？”（2015）<https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf>（2018.5.27 参照）
- (3) 館野泰一、高橋俊之：“リーダーシップ教育のフロンティア【研究編】高校生・大学生・社会人を成長させる「全員発揮のリーダーシップ」”，北大路書房（2018）
- (4) Walter, Dick., James, O. Carey. and Lou, Carey.：“はじめてのインストラクショナルデザイン”，ピアソンエデュケーション（2004）